

人里のニエスレタ

日本ホタルの会 1997 / 3 第8号

中国のホタル文化誌

日本ホタルの会理事 小西正泰

古来、世界中でホタルと最も深い関係をもってきたのは私たち日本人である。一方、当初は日本文化の源泉であった中国では、ホタルとどのようにかかわってきたのであろうか。その一面をながめてみることにしたい。

中国は今はいの「漢方薬」の本場だけあって、ごく古い時代からホタルを薬用に供していた。まず『神農本草経』（紀元前2～1世紀）には、ホタル（螢火）が目をもくし、小児のやけどを治すことなどが記されている。はるかくだって明の李時珍の『本草綱目』（1596）には、ホタルについていろいろなことが書いてある。そのなかからいくつかの話題をひろってみる（以下、概要の引用）。まずホタルは「化生類」に分類されている。ホタルには3種類あり、1種はカヤ（茅）の根から生じて飛び、1種は竹の根から生まれ、翅がなくて俗に螢蛆（幼虫または無翅の雌）とよばれる。あとの1種は水螢で水中にいる（ヘイケボタルの幼虫か）。薬には飛ぶホタル（全身）を用いる。ホタルは辛くて微温があり、毒はない。ホタルが邪を退け、目を明るくするというのは、この虫が夜に光ることに由来する。一家50余人が疫病に感染したが、ホタルの丸薬（螢火丸）を身につけていた4人だけは病にかからなかったという。従軍すると

きは腰に下げて身を守り、家では戸上に掛けて盗賊を避けた。そのほか、7月7日の夜にとったホタル14匹を髪に燃てつくと黒くなる。またホタル14匹を大鯉の胆のなかに入れ、100日間陰干して粉末にし、目に少量ずつつくと、よく見えるようになるという。これには白犬の肝を用いることもある（以上『本草綱目』より）。薬として利用するホタルの種類は、最近の中国書によるとヘイケボタルであるという。つぎに清の陳扶揺の『花鏡（秘伝花鏡）』（1688）第6巻の「養昆虫法」には、ミツバチ、チョウ、セミや鳴く虫とともにホタルについても書かれている。その一部を紹介する。ホタルは腐草が化したものである。日中は光らないが、夜は光って空に群飛し、まるで小さな星のようである。池のあたりに生ずるものを水螢という。好んで蚊を食う。好事家は、いつも10匹か20匹のホタルを捕らえて小さな薄絹の袋に入れる。夜は灯火に代えることができ、その光で本を読む。これを宵燭という。子どもたちはこれをおもちゃにする。水螢はたいいてい水中にいる。隋の煬帝は夜遊びするのに、ホタルを数石（1石は約180リットル）ほど放った。その光は月のように明るかったというが、これは度を越した遊びであると批判している。

以上の記述について二、三の蛇足を記す。まず、腐草がホタルになるというのは古代から伝わる俗説で、日本でも平安時代から広く信じられてきた。けれども江戸後期の博物学者・小野蘭山は『本草綱目啓蒙』（1803～06）のホタルの項で、「皆水虫ヨリ羽化シテ出、夏後卵生シテ後水虫トナル、腐草化して蛍トナルニ非ス」と、正しい自説を述べている。水蛍（ヘイケボタル）が「蚊を食う」のは誤りであろう。ホタルの光で読書するのは、有名な車胤（4世紀）の故事による。日本でも小学唱歌「蛍の光」で広く歌われている。そのほか、中国では子どももおとなもホタルを集めて遊んだことは注目にあたいする。

ところで、中国にはホタルが光る起源について、つぎのような民話がある。むかし若い夫婦とその息子が幸せに暮らしていたが、母親が若くして死んだので、父親はまもなく再婚した。ところがその継母は少年

につらくあたって無理な要求ばかりするので、少年は彼女を恐れるようになった。ある日、彼女は少年に数枚の銅貨をわたして、山向こうの村へゆき、落花生油を買ってくるように言いつけた。少年は、やっとその村に着いたときに、お金をどこかへ落としてしまったことに気がついた。夢中でそれを探しているうちに嵐になり、少年は流れにはまっておぼれてしまった。少年の心からは、死んでからも継母にたいする恐れが去らず、その魂が明かりをともしたホタルになって、いつまでも銅貨を探しつづけているのである。この民話は、アメリカのL. W. クラウセン女史（1954）が紹介しているものであるが、私は中国の原典が何かをまだ確かめていない。なお、中国には「老虎とホタル」という民話もあるが、日本では紹介されたことがないと思う。

以上は、だいぶむかしの中国事情だが、最近の状況を知りたいものである。

第5回「ホタルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウム アジアに広がる「心なごむ人里環境創設」の輪

農林水産省 野菜茶業試験場 佐藤安志

平成8年10月4日名古屋市公会堂にて、日本ホタルの会主催の第5回「ホタルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウムが開催され、全国から環境問題に関心の深い市民や学生、研究者、実際に自然環境の保全や再生に携わっている行政担当者や企業関係者など約250名の参加者が集まりました。

シンポジウムでは、日高敏隆会長が「豊かな人里とは」と題した基調講演を行い、『人里とは自然の論理と人間の論理の折り合いがとれた所であり、これからはただ単に「自然を守る」のではなく、「心なごむ人里環境の創設」こそが必要』と日本ホタルの会の目指す活動方針を示しました。

引き続いて、20年以上にわたる名古屋城外堀に生息するヒメボタルの保全・再生活動や、地元愛知県におけるホタルの里づくり運動の展望等の事例報告がなされました。また、豊橋市の朝倉川育水フォーラムによる「朝倉川を育み、ホタルを呼び戻そうという運動」の報告では、水源を含めた河川流域ビジョンの策定や、市民、企業、行政が一体となった全市的取り組みである点など注目すべきものがあり、各地の今後の活動の参考になるものが多かったのではないかと思います。その後、本シンポジウムを後援して頂いた農林水産省、建設省、環境庁から、各省庁の環境保全や生物多様性の保全に関する取り組みについて報

告がなされました。矢島稔副会長の司会による総合討議でも、実際に自然環境の保全や再生に携わっている市民や行政担当者などから様々な意見が寄せられ、活発な討議が行われました。また、今回国外から特別に参加された台湾の鳥山自然保育公園の方々により、「台湾におけるホタルの生息環境保全・再生の動向」に関する話題提供が行われました。急速な経済の発展を遂げている台湾では、かつての日本と同様な環境問題が浮上し、環境の保全に対する関心が高まってきているようです。そして、台

湾でもやはりホタルが環境保全シンボルの一つとされているようです。紹介されたスライドを見るかぎり日本ではあまり馴染みのない種類のホタルも多いのですが、これらのホタルは人里に好んで生息しています。つまり、台湾でも多くの人々が要求する心なごむ自然とは、原生林の様な天然の自然ではなく人里環境であり、日本と台湾の様に気候や文化が異なっても、「心なごむ人里環境の創設」は共通の課題であることが理解されました。

沖縄ホタル通信（その2）津堅島紀行

琉球大学農学部 豊口 敬

津堅島は沖縄本島中部の勝連半島の南東約5kmに位置する小さな島であり、島の92ヘクタールがニンジン畑で、まさにキャロットアイランドと呼ぶにふさわしい島です。島の周りにはマリンスポーツの海が広がり、非常にのどかなところですよ。私は1997年1月2日にホタル調査が目的でこの島を来訪しました。津堅島行きの船は、勝連半島の平敷屋港（ホワイトビーチ近く）から1日に4-5便出ており、この港から津堅島を目と鼻の先に見ることができます。私は250ccのバイクを船に積んでPM 5:30に平敷屋港を出発し、約30分で津堅島に着きました。まだお正月の最中なので島内は静寂としていました。早速港からすぐ目の前にある南原旅館に行き、夕食をご馳走になりました。食事をいただきながら民宿の主人に「この島でホタルは見れますか？」と質問をしたが帰ってきた言葉は「一度も見たことないな」であり、拍子抜けしてしまいました。腹ごしらえをし元気を蓄え、PM 7:00に調査に出かけました。島はゆっくり歩いて1-2時間程で周れる位の大きさであり、夜はほとんど人は外に出ておらず、静寂としています。いったいこの島に

は何がいるのだろうか？果たしてホタルはいるのだろうか？と期待で胸を躍らせ、全神経を目に集中する。ちょっとした林や草むらがあると立ち止まり懐中電灯を消して暗闇を注意深く見る、というようなことを繰り返しながら先に進むが、いっこうに光る物は見つからない。タチアワユキセンダングサ（花びらが白い）が林縁に群生しており、この花に光が反射してよくホタルと見間違えました。くまなく2時間位歩き回り島2周目というときに、いよいよ何もいないのかという不安が脳裏をよぎり、疲労と共に上空を見上げるとこりゃビックリ、満天の星が出ていました。下は真っ暗で何も光っていないが上は光っているという状況でした。この島の植生は非常に単純で、主に海岸近くではモクマオウやギンネムが生い茂り、内陸（民家周辺）ではガジュマルが生えていました。林床はかなり乾燥しており、奥へ入っていくとすぐ砂になって海岸に出るというような状況でした。林内にはカタツムリの殻が散在していました。ホタルが食ったのかというちょっとした期待がわくが、この期待は落胆へと変わりました。林内にはどこでもと言っていいほど

ネズミ（沖縄の方言でピーチャー）がいました。多分このネズミ等が食った跡なのだろう。いよいよ島2周目に入り、林という林は全てチェックする。本当に何もホタルはいないのだろうか？と思っているといきなり近くをバッサバッサという羽音と共にオオコウモリ（多分オリイオオコウモリ）が飛んだ。ビックリしていると今度は下の草むらでキーという鳴き声と共にネズミが草むらに入った。これらの動物達は私を歓迎してくれたのだろうか？しかし他の動物は見れませんでした（見れないというよりいないのでは？）。約2時間位で2周目を終えたが結局何も光っているホタルは見つけられませんでした。

今回は、島内をくまなく4時間ちょっと見て回ったが、ホタルは確認できませんでした。この島には本当にホタルはいないのだろうか？たまたま見れなかっただけなのかもしれないが、沖縄本島では今の時期には比較的乾燥していてもオキナワマドボタルというホタルがほぼ終令幼虫で普通にみることができるので、津堅島にも時期的

には見れてもおかしくはないのだが？この島の植生はかなり単純であり、島内には林がほとんどなく畑で占められているのでホタルはいないのか？しかしホタルの餌になるだろうカタツムリ（オキナワウスカワマイマイやパンダナマイマイ等）は林内に普通に棲息しているので、ホタル（特にオキナワマドボタル）がいてもおかしくないのだが…。

翌日の昼間に観光を兼ねて昨日見て回った場所を確認するが、特に目立った物は何も発見できませんでした。ただギンネム林に入ろうとした時に1本の蔓性植物に集まっていた十数匹のリウキュウアサギマダラ（蝶の1種）が一斉に飛び立ったのには我を忘れて感動しました。また林を通り抜けて海に出たときはしばし開放感に浸り、「こういう島に来たらやっぱり海が一番」という気持ちになりました。

海が美しい小さな島ですが昼は海水浴、夜は天体観測を行ってみるの好適で、非常にのどかな環境でした。



津堅島遠景

事業報告

日本ホテルの会では、1996年度におきまして以下の事業を行いました。

1. シンポジウムの開催

日 時 1996年10月4日(金)
場 所 愛知県名古屋市公会堂
後 援 環境庁・農林水産省・建設省・愛知県・岐阜県・三重県・名古屋市・
中日新聞
題 名 第5回「ホテルを通じて身近な自然を考える」シンポジウム
ー人里に心なごむ自然環境を取り戻そうー

2. 研修会の開催(2回開催)

第4回研修会

日 時 1996年6月7日(金)～8日(土)
場 所 宮城県北川町「ホテルの館」
共 催 宮城県北川町
協 力 キリンビール(株)

第5回研修会

日 時 1996年6月15日(土)～16日(日)
場 所 キリンビール(株)福岡工場 ゲストホール
協 力 キリンビール(株)

3. 出版発行

人里へのニュースレター (第6号～第8号)
ハンドブック 「螢・人里・九州ーホテル・ハンドブック」
会誌 「ホテルと人里」 第5号(近日発行予定)

4. 受託事業(3件)

- 1) 受託事業名 「鳴立川現況調査」
発注元 神奈川県大磯町
- 2) 受託事業名 「朝倉川流域ビジョン」作成
発注元 愛知県豊橋市商工会議所
- 3) 受託事業名 「ホテルドーム監修」
発注元 山梨県下部町

事務所移転のお知らせ

この度「日本ホタルの会」は、皆様のおかげをもちまして、設立5周年を迎えることとなりました。これを機に当会独自の事務局を開設する運びとなりましたので、お知らせいたします。

当会の事務局は、設立当初(株)ドレックスのご好意により、事務局を間借りする形(ボランティア)でスタートしました。その後1995年3月からは、事務局業務を(有)燦颯(サンハヤテ)に委託して参りましたが、1996年の10月に委託先の燦颯が移転することとなりました。折しも「日本ホタルの会」は設立5周年を迎え、官公庁や企業、任意団体などから、ホタルや人里環境に関わる様々な要望、要請を受けるまでになりました。そこで、これを機に当会のより一層の発展、展開をはかるため、当会独自の事務局を開設する運びとなった次第であります。会員の皆様のご理解と今後益々のご協力をお願い申し上げます。

なお、新事務局の開設に際し、事務運営に一時混乱を来し、会員の皆様には大変ご迷惑をおかけしましたことを深くお詫びいたします。

新住所 〒150 東京都渋谷区渋谷2-7-13

大一ビル2F

TEL&FAX 03-3498-3345

事業計画の予告

以下の通り計画中です。

「豊かな人里の保全と再生の方法の実践」

日時 1997年6月20日

場所 千葉県大原町

日程 13:00 受付

13:30 - 16:30 研修会

18:00 - 20:00 現地見学とホタル観察

詳細が確定しましたら別途通知致します。

なお、変更もありえます。

会費更新の手続きはお早めに

日本ホタルの会の会費は年度制です。で、毎年3月で会費切れとなります。現在、1997年度会費の受付中です。同封の郵便振替用紙にてご送金下さるようお願い致します。

当会の活動は、皆様の会費によって成り立っております。引き続きご支援下さいますようお願い致します。

人里へのニュースレター 第8号 平成9年3月20日発行

編集 日本ホタルの会 ニュースレター編集事務局

発行 日本ホタルの会

〒150 東京都渋谷区渋谷2-7-13

大一ビル2F

TEL&FAX 03-3498-3345



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

印刷 プリントランド・スガイ

〒239 神奈川県横須賀市津久井153

TEL 0468-47-0301 FAX 0468-47-0313